8. 歴史と伝説の重層性
—西アジアにおけるimitatio Alexandri—

山 中 由 里 子*

キーワード: アレクサンドロス、イミタチオ・アレクサンドリ、歴史、伝説、比較文学、重層性、ペルシア文学、アラブ文学、君主鑑

Key Words: Alexander the Great, imitatio Alexandri, history, legend, comparative literature, multilayeredness, West Asia, persian literature, arabic literature, mirror for princes

1. はじめに
2. 歴史と伝説の重層性
3. イミタチオ・アレクサンドリ
4. 西アジアにおけるイミタチオ・アレクサンドリ

1. はじめに

本論では、題目を見て分かるように、「重層性」という言葉をかなり自由に解釈している。西アジアの社会構造そのものの重層性については、他の発表や討論の中で十分に議論されると思うので、少し違った観点から、自分の研究テーマに当てはめて、重層性の概念を捉えてみた。

ここでは、西アジアにも広く流布したアレクサンドロス大王の伝説の例をとりあげて、歴史を取り巻く伝説の層、さらにそれを包み込む歴史の層、この歴史と伝説の重層性、歴史と文学の往環について論じたいと思う。

なお、「歴史」と「伝説」という言葉の定義をまずしておきたい。ここでは文学的ジャンルとしての伝説の狭い意味にとらわれず、過去のある時点で実際に起こった出来事あるいは状況、伝説の層の中心にある固い芯のようなものを「歴史」とし、後世にその出来事あるいは人物について語られた、あるいは記されたディスクール—実際にその担い手達によってそれが歴史的事実として意識されていた場合も含めて—を総体的に「伝説」と呼ぶことにする。ただし、果たして歴史に固い芯があるのか、我々が「歴史」と呼んでいるものも結局は人間の想像力の中で再構築されたもので、時代の思潮に応じて常に書き換えられてゆく流動的なものではないかという疑問もでてくる。

* 東京大学東洋文化研究所（現国立民族学博物館）

「重層性」をキーワードにアレクサンドロスにまつわる伝説について考察することによって、このような問題にも光をあてることができるのではないかと思う。

2. 歴史と伝説の重層性

それではまず歴史と伝説の重層的な関わりとは一体何かということを説明する。

つまり、ある歴史上の人物の成し遂げた偉業が伝説と化して、口頭伝承、あるいは英雄物語のような文学作品、あるいは年代記の一部として広く流布し、さらにそれを読んだ、あるいは伝承を耳にした後世の君主、権力者がその伝説的偉業を模倣しようとしたり、あるいは自らの事業—例えば征服活動、または大々的な建設事業—を過去の英雄にまつわる伝説になぞらえて行い、一種のプロパガンダとして語り、それが歴史として記される。このようなプロセスの繰り返しのことを、歴史と伝説の重層性と呼ぶことができるのではないかと筆者は考えた。一国の、あるいは一地域の歴史を時間軸に沿って追うのではなく、アレクサンドロス大王のような人物を切り口として「過去」を輪切りにしてみると、歴史と伝説が年輪のように重なった、バームクーヘンのような重層的構造が見られるのではなかろうか。

そこで、このバームクーヘンの中心に置くのは、もちろん歴史上に実在した人物としてのアレクサンドロスが実際に行った東方遠征である。周知のとおり、アレクサンドロス大王は紀元前356年に生まれ、20才で即位し、紀元前323年に33才の若さで死ぬまでにエジプトからインダス河領域までの広大な土地を征服した。

彼の死後その後継者たち、いわゆるディアドコイであるアンティゴヌス、プトレマイオス、セレウコス、リュシマコスはアレクサンドロスの残した帝国の支配権を握るための権力争いに明け暮れ、帝国は分割される。ディアドコイたちは我こそはアレクサンドロスの真の後継者であることを強調するために、アレクサンドロスの肖像を取り入れた、あるいは、自らをアレクサンドロスに見立てたコインを造幣する（図版1-A, 1-B）。アレクサンドロスの模倣はすでに彼の死後直後から始まっていたのであった。そして彼の存在はヘレニズム諸王国の代々の支配者達に常に意識されていた。

このような後世の支配者達が憧れ、模倣しようとしたのは歴史的アレクサンドロスではなく、伝説的英雄の域に入ったアレクサンドロスであった。アレクサンドロスに関する知識は彫像・絵画、貨幣、大王が遠征先に建設した記念碑や都市、あるいは伝記や物語などの形でギリシア・ローマ世界に拡がっていった。

図版1-A　プトレマイオスのコイン
（出典: Bieber［1964］）

図版1-B　リュシマコスのコイン
（出典: Bieber［1964］）

3. イミタチオ・アレクサンドリ

さて、Alexander Magnus、アレクサンドロス大王という称号はローマ時代に付けられたとされるが、アレクサンドロスはローマの軍人・政治家たちによって世界征服者のモデルとして見られるようになり、ますます理想化されていった。この現象をイミタチオ・アレクサンドリ（imitatio Alexandri）、つまり「アレクサンドロス模倣」といい、西洋古代史の分野では確立されたテーマである[1)]。アレクサンドロスをモデルと仰いだ（あるいはその名を自らの引き立て役として利用した）ローマの政治家・皇帝にはポンペイウス、カエサル、マルクス・アントニウス、アウグストス、カラカラなどが挙げられる。

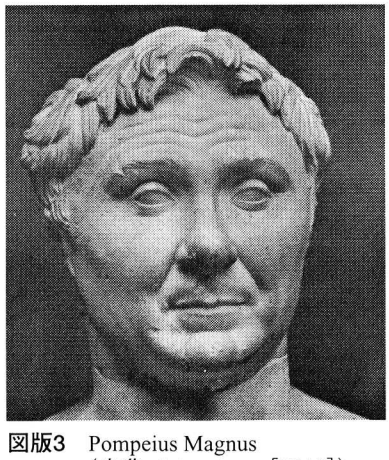
例えば、ポンペイウスは若い頃から取巻連によってその容姿、物腰、能力などがアレクサンドロスに比すると追従され、大王を意識するようになったという[2)]。アフリカ遠征から戻った頃からアレクサンドロスと同じ Magnus という称号を使用するようになり、かつてのアレクサンドロスとダレイオスの戦いの舞台であった小アジアにおいてポントスの王ミトリダテスを破ったことによって Pompeius Magnus という名は広く受け入れられるようになった。Megalopolis, Magnopolis, Pompeiopolis などのポンペ

1）以下をはじめ、多くの研究がある。Bohm［1989］; Croisille［1990］; Cunningham［1971］; Kienast［1969］; Michel［1967］; Weippert［1972］; Wirth［1976］; Wlosok［1978］.

2）"Sed Pmpeius, a prima adulescentia sermone fautorum similem fore se credens Alexandro regi, facta consultaque aemulus erat."［Sallust 1891: Fr. 3. 88］

イウスによる都市の建設もアレクサンドリアをはじめとする大王の都市建設の前例に従ったものである。さらに、アレクサンドロスの御用彫刻家リュシッポスによる大王の彫像の独特のスタイル—前髪が額の中央で持ち上がり左右に流れる anastole の髪型、わずかにしかめた眉、宙を見上げる澄んだ眼差し（図版2）を真似た肖像を作らせるというところまでポンペイウスのイミタチオ・アレクサンドリは徹底していた［Bieber 1964: 69］[3]（図版3）。ただ、中年になったポンペイウスの小太りの顔にはこの見立ては多少滑稽でさえあるといえよう。

図版2　ペルガモン出土の頭像
（出典: Bieber［1964］）



図版3　Pompeius Magnus
（出典: Schweitzer［1948］）

図版4　アレクサンドロスの肖像が刻まれた金の指輪
（出典: Bieber［1964］）

3）ローマ皇帝カラカラ（211-217）もアレクサンドロスの彫像の容姿を模倣した一人である。

最後のヘレニズム王朝プトレマイオス家の女王クレオパトラの死によって紀元前30年にエジプトがついにローマの属州となると、アレクサンドロスの帝国のほぼ全域がローマの支配下に収まることとなる。初代ローマ皇帝アウグストスがアレクサンドロスの肖像が刻まれた指輪（図版4）を紀元前29年から23年頃まで認印としていたことからも、ローマの支配者が自らを大王の後継者と自認し、アレクサンドロスを帝国統治の象徴としていたことがわかる。

これらの権力者達は単に伝説的英雄アレクサンドロスに憧れ、大王の名を語ることによって自らの偉大さを強調しようとしただけでなく、広大なローマ帝国の運営に関わる具体的な政策を考案する際にも、様々な民族を支配下に治めたアレクサンドロスの世界帝国を理想としたのではないかと思われる。アレクサンドロスがギリシア至上主義の側臣（史料によってはアリストテレス）の忠言に反して、ギリシア人とバルバロイ（非ギリシア人）を対等に扱ったという伝承［Plutarch: De Alex. Fort. 329b; Strabo: I. 4. 9］や、「都市を創建し、人々をアジアからヨーロッパへ、そしてヨーロッパからアジアへ移住させ、民族間の結婚や同盟によって調和と友好と親族関係をもたらし、二つの偉大な大陸を結ぶ」［Diod.: XVIII. 4. 4］というアレクサンドロスの東西融和 homonoia の夢［Tarn 1921; *ibd.* 1939］は、理想化された後世の伝説である可能性が大きいが、ローマの統治理念に影響を与えたことは確かである。例えば、アウグストスが当時のコインに concordia Augusta と記した［Mattingly 1923: CCXXV］のも、全世界の統治者、仲裁人として homonoia をもたらそうとしたとされるアレクサンドロスを当然意識していたからであろうし（concordia はギリシア語の homonoia に相当するラテン語）、また、カラカラが212年に帝国中のあらゆる民族の自由民にローマ市民権を認めたのも、アレクサンドロスがギリシア人もバルバロイも一つの共同体の構成員として差別をしなかったという伝承に倣ってのことであったといえる。

このように、ローマ帝国の拡大の過程において、政治家・皇帝達のイミタチオ・アレクサンドリは大きな重要な役割を果たしたのであった。

東ローマ帝国の創始者、コンスタンティヌスも自らをアレクサンドロスになぞらえて Constantinus Magnus、大王の称号を使った。彼のプロパガンダの中にはアウグストス、トラヤヌスといった過去の偉大なローマ皇帝とともにアレクサンドロスに関する言及がみられる。時代は飛ぶが、このコンスタンティヌスによってビザンツ帝国の首都とされたコンスタンティノポリスを後に攻略したオスマン朝のメフメト2世の寄進文書にアレクサンドロスに関する一節があるのは非常に興味深い。ヨーロッパとアジアの要であるコンスタンティノポリスを首都としたコンスタンティヌスも、また後にそ

れを手に入れたメフメト2世もともに、東西を結ぶ大帝国を築いたアレクサンドロス—実際には、その領土の大部分はすでにアケメネス朝ペルシアの支配下にあったものであるし、征服地の統治に本格的に取りかかる前にアレクサンドロスは死んでしまい、後継者達の争いによって帝国は分裂してしまうのであるが—を支配者の理想像と仰いで、自らの事業が大王のそれに匹敵するものであるということを強調しようとしている。このようにアレクサンドロスの記憶は後代の歴史的場面に繰り返し働きかけ、伝説は再生され歴史となっていったのであった。

4. 西アジアにおけるイミタチオ・アレクサンドリ

それでは西アジアのイミタチオ・アレクサンドリとしては他にどんな例が挙げられるであろうか。

イスラム世界においてアレクサンドロスはアル・イスカンダルと呼ばれ、また、コーランの第18章「洞窟の章」に登場するゴグとマゴグの野蛮な民族を退治する英雄、Dhū'l Qarnain（二本角）と同一視されることもあり[4]、偉大な征服者としてよく知られているが、そもそも西アジアにおけるアレクサンドロスに関する知識はどのようなかたちで伝わったのであろうか。

中世のアラビア語・ペルシア語資料に登場するアレクサンドロス像は、それが年代記などの中で歴史として記されている場合でも、かなり伝説化されたものである。これらの伝承のもととされているのは「偽（プセウド）カリステネスのアレクサンドロス・ロマンス」と現代の研究者に呼ばれているアレクサンドロスを主人公とする英雄物語である。この呼び名は、ある写本にアリストテレスの甥であり、アレクサンドロスの御用歴史家でもあったカリステネスの名が誤って記されていたことに由来する。紀元2世紀か3世紀頃までにエジプトのアレクサンドリアにおいて編纂されたといわれているこの物語は、アレクサンドロス自身が征服したよりもさらに広大な地域へと伝わっていった。24ケ国語、80種以上もあるといわれるこの物語の様々なヴァージョンは、文献学者達によって、α、β、γ、δの4系統に分類され、研究されてきた。ネルデケというドイツの学者の説によると、δ系のアレクサンドロス物語が、まずパフラヴィー語訳を介して中東に入ったようである［Nöldeke 1890］。このパフラヴィー語版はおそらく6世紀以前にアルメニア人の手によって訳されたものであろうといわれてい

4) ズ・ル・カルナインがアレクサンドロスのことであるか否かについては、コーラン注釈者たちの間でも議論の的となってきた。蔀［1989］を見よ。

るが、現存しない。このパフラヴィー語訳からシリア語、そしておそらくアラビア語やペルシア語訳が作られ、アレクサンドロス物語は中東各地に浸透していった。コーランの「洞窟」の章にこの物語の一部が含まれているのも、シリア人の間で語られていた伝承をムハンマドが聞き知ったのであろうというのが先述のネルデケの説である。

このアレクサンドロス物語に基づいた伝承でアラビア語で書かれたものとしては、ディーナワリー、タバリー、マスウーディー、サアーリビー等による歴史書に含まれている断片的な記述であり、物語として完全なかたちで残っているものはほとんど知られていない[5)]。イブン・アル・ムカッファー Ibn al-Muqaffa‘（760年頃没）によってパフラヴィー語からアラビア語に訳されたとされる、ササン朝末期に編纂されたイランの列王伝 Khudāy-nāma（アラビア語訳、Siyar Mulūk al-Furs）は今では散逸してしまっているが、その中にはアレクサンドロスの生涯に関する部分が含まれていたと考えられる。上記に挙げたようなアラブの歴史家たちの情報源はイブン・アル・ムカッファーのアラビア語訳であった可能性が高い。

後述するペルシア文学の場合に比べるとアラブ文学においては、完結したひとつの物語としてのアレクサンドロス伝説は、文字のかたちで残らなかった口頭伝承として民衆の間で親しまれていた可能性は決して排除できないもの、君主や権力者のために書かれたような文学作品のテーマとしては取り上げられなかったようである。

そのかわりに、アラブの「君主の鑑」文学あるいは教訓文学においては、アレクサンドロスはその師アリストテレスと対になってよく登場する。アリストテレスがアレクサンドロスに対して与えたとされる統治に関する様々な忠告や訓戒の類は、いわゆるアダブの領域においてアレクサンドロス物語と並行して発展した。アラブ世界において「第一の師」mu‘allim al-awwal と呼ばれたアリストテレスの哲学者としての権威も相まって、これらはアレクサンドロス自身の模範的君主としてのイメージをさらに高める効果を生んだといえよう。

これらのアレクサンドロスへのアリストテレスの忠言は、おそらく実際にアリストテレスによって書かれたものではないのだが、その起源は『アレクサンドロスに宛てたアリストテレスの書簡集』*Rasā'il 'Arisṭāṭālīs 'ilā-al-Iskandar* と呼ばれる、ウマイヤ朝時代にアラビア語に訳されたとされる手紙のコレクションに遡ることができる。

この書簡集については、イブン・アンナディームの『目録の書』の中に次のような記述がある。

5）唯一校訂されているのがスペインで発見されたアラビア語版のアレクサンドロス物語である［Garcia Gomez 1929］。

サーリム、異名をアブー・アルアラーという。ヒシャーム・イブン・アブド・アルマリクの書記であった。アブド・アルハミードと血縁関係にあり、文語の達人（fuṣaḥa'）で雄弁家（bulaghā'）の一人である。『アレクサンドロスに宛てたアリストテレスの書簡集』*Rasā'il 'Arisṭāṭālīs 'ilā-al-Iskandar* は彼が翻訳したか、あるいは翻訳させたものを彼が手直しした。彼の書簡集は百葉ほどある。[Ibn al-Nadim: Vol. 1, 117]

このウマイヤ朝第10代カリフ、ヒシャーム（724-743年）の書記であったというサーリム・アブー・アルアラーSālim Abū al-'Alā'という人物についても、彼が訳させ手直ししたという『アレクサンドロスに宛てたアリストテレスの書簡集』の存在も、従来のアラブ文学通史ではあまり問題とされなかったようである。しかし、マリオ・グリニャスキーというイタリアの研究者がこの書簡集に関して極めて精細な一連の研究論文を発表し、イスタンブールに現存する写本に含まれる書簡が、まさにこのイブン・アンナディームが挙げているアリストテレスの書簡集と同一であることを指摘した[Grignaschi 1965-66; *ibid.* 1967; *ibid.* 1975; *ibid.* 1976; *ibid.* 1982; *ibid.* 1993]。残念ながら書簡集全体の校訂はされておらず、彼の仮説や結論に疑問の余地が全くないわけではないが、彼の説が正しいとすればアラビア語による書記散文文学の最も古い例がこの『アレクサンドロスに宛てたアリストテレスの書簡集』であることになる[6)]。

グリニャスキーが主に使用したのは、イスタンブールに現存するアヤ・ソフィア4260（1314年）とファーティフ5323（1316年）のアラビア語写本であるが、これらはアリストテレス、フィリッポス、アレクサンドロスが書いたとされる手紙など16篇を含んでいる。写本ではこの書簡集全体の題はついていないが、初めに「この部分は、二本角（ズ・ル・カルナイン）のアレクサンドロスとその師である哲学者アリストテレスとの間に交わされた手紙や問答の内で最も優れていると思われるもの、さらにアレクサンドロスのための弔辞から選りすぐったものを含む。」という断り書きがついている。イタリアのこのアラブ学者によると、サーリムのもとで翻訳活動をしていたハッラーンのヘルメス主義者が、ギリシア語の原典からいくつかの項目を選び出しそれらをアラビア語に直し、翻訳の過程でヘルメス主義的な教理や語彙、またササン朝の「君主鑑」の教えを織りまぜていったという。さらにその翻案されたテキストにサーリムが、ヒシャームの帝国の東方における実際の政治的状況を暗示するように—つまりアリストテレスの東方地域の扱いに関するアレクサンドロスへの忠告がサーリムからカリフ自身へ向けられ

6) ラサムは「ケンブリッジアラブ文学史」シリーズの中の論考でグリニャスキー説をほぼ認めている［Latham 1983: 156］。

たものと読みとれるように—修整を加えた。

書簡集の内容については別の機会に紹介するので詳しくは触れないが［山中 1998］[7]、ここで指摘したいのは、この書簡集がまさに折り重なる歴史と伝説の層の上に成り立っているということである。つまりどういうことかというと、学者としてまだそれほど名をあげていない初老のアリストテレスが若きマケドニアの王子の教師を務めたという史実の周りに、偉大な哲学者と世界征服者の出会いというドラマチックな伝説が生じ、アレクサンドロスの遠征後に師弟の間に交わされたとされるフィクショナルな手紙—大きく分けると2種類：アリストテレスの忠言とアレクサンドロスのインドの奇観についての報告—というものが現れ、ヘレニズム後期・ローマ時代に流布した。特に前者のアリストテレスの忠言は、キケロによってカエサルへの助言の手紙のモデルとして使われるなど［Cicero 1965-70: XII 40］、ローマ時代の政治家にも影響を与えたようである。従ってサーリムがアラビア語に訳させたというのは、古代後期にはアリストテレスの著作の一部として知られていた書簡集のようである。ただしギリシア語ないしラテン語の原典が現存しないため、訳者がどの程度翻案したのか、サーリム自身がどれほど手を加えたのかを見極めるのは難しい。ともあれ、キケロがアリストテレスの手紙をカエサルへの進言のモデルとしたように、サーリムもカリフに直接的に上申してその感情をそこなうような危険を冒すことなく、この書簡集の枠組みを利用し、巧緻なレトリックのオブラートに包んで、君主に相応しい品行、行政、軍事、あるいはより時事的な問題（東方地域、ペルシア人の扱いなど）についてカリフに忠告することができたのであった。これが実際のカリフの政策、態度にある程度反映されたとすれば、これも一種のイミタチオ・アレクサンドリであるといえるのではなかろうか。

このコレクションの第8の書簡「平民に対する政策」Siyāsat al-ʻāmmiyya は、改変に

7）16篇のそれぞれの主題は次のようなものである。1「哲学の勧め」（アリストテレスからフィリッポスに宛てた手紙）、2「アレクサンドロスの教育者としてアリストテレスを招へいする」（フィリッポスの返事）、3「招待への返事」（アリストテレスは過去の哲学者達の学院があるアテネを離れることを拒否する）、4「道徳に関する手紙」、5「アリストテレスのアレクサンドロスへの忠言」（フィリッポスはアリストテレスに王位を継ぐアレクサンドロスのために訓戒を与えるよう依頼する）、6「シシア、西の国の征服に際しての祝辞」、7「アンフィーサーン、バビロンの国の征服に際しての祝辞」、8「平民に対する政策（Siyāsat al-ʻāmmiyya）」、9「アレクサンドロス、帝国の行政に関する一般的な忠告を求める」、10「その返事とペルシア征服に際しての祝辞」、11「ペルシアの貴族を処刑することに関して忠言を求める」、12「そのような処置は回避するようにとの返答」（権力を分割せよという忠告）、13「ホラーサーン地方征服に際しての祝辞」、14「アレクサンドロスがインドで嘆賞した黄金の館よりもさらに完全なこの世の本質に関する金字の手紙」、15「斡旋の手紙」、16「弔辞からの精粋」。

改変を重ね、占星術、錬金術、相貌学などのオカルト的な要素が加わった末に『秘密の中の秘密』*Sirr al-asrār* として広まり、ラテン語訳（*Secretum Secretorum*）から中世ヨーロッパ諸言語にも訳されていった。さらには、この書簡集の一部のアレクサンドロスへの忠言は、過去の知恵者（ルクマーン、アルダシール、預言者ムハンマドなど）の言葉を集めた諺集に断片的に取り入れられていき、金言・格言（ḥikma）として一般化されていった。アレクサンドロスの模範的賢王としてのイメージはこのような文学的媒体を通して広がっていった。

さて、一方、ペルシア文学においてアレクサンドロスを題材とした作品にはフィルドウスィーの『王書』のアレクサンドロスの治世の部分やニザーミーの『イスカンダル・ナーメ』（第一巻『栄誉の書』、第二巻『幸運の書』）、ジャーミーの『アレクサンドロスの知恵の書』、アミール・ホスロウの『アレクサンドロスの鏡』などの韻文のアレクサンドロス物語や、タルスースィーの『ダーラーブ・ナーメ』や作者不詳の『イスカンダル・ナーメ』などの散文作品がある。フィルドウスィーのアレクサンドロス伝は、その大筋は前述の偽カリステネス系の伝承に拠っているが、ニザーミーの「アレクサンドロスの書」になると詩人自身の作意が物語全体を貫いており、伝説に想を得たひとつの文学作品として成り立っている。そして散文のアレクサンドロス物語においては民間伝承の要素が非常に強く表れており、偽カリステネス系のアレクサンドロス・ロマンスからは大分離れた奇想天外な独自の展開を遂げている。

韻文の「アレクサンドロスの書」はいずれも君主に捧げられたものであり、ペルシア語文化圏においてこれが宮廷人を魅了したテーマであったことがわかる。このことは、ペルシア詩人ファッロヒー Farrokhī がガズナ朝のマフムードのソムナート遠征を讃えて捧げたカシーダ（長詩）に次のように詠われていることからも明らかであろう。

> fasāneh gasht o kohan shod ḥadīth-e Eskandar
> sokhan novār^{a} ke nou rā ḥalāvatī-s^{e} degar
> アレクサンドロスの物語は既に伝説と化し古びてしまった。
> 新たな語りを持てよ、新しいものにはまた別の甘みがあるものだから。

フィルドウスィーがちょうど『王書』をまとめていた時代には、すでにアレクサンドロスの話は語り尽くされて古びてしまうほど浸透していたということを最初の半句は示している。そしてマフムードの功績を讃える「新たな語り」が、このよく知られた世界征服者の物語に匹敵するか上回るものであるということを詩人は示唆しようとしているのである。

このように歴史書の中の人物というだけでなく、繰り返し文学作品の題材にもされたことによって、イスカンダルの名は偉大な王の代名詞のように、あるいは君主の「枕詞」のように使われるようになったのである。君主を称賛する際にアレクサンドロスを引き合いに出すという例は、さらに後代の年代記や碑文にもよくみられる。

例えば、18世紀にイランのタブリーズに建てられた城門に掲げられた石版の碑文には次のような詩が刻まれている。

> この建造物が神の加護の元に、時の災難から永遠に守られたまえ。ハーンの中のハーンの恩恵によって建てられたこの城壁の塔には天も驚きを示す。公正な国の君主ナジャフ・ゴリー・ハーンには支配の輝きが許されている。わずかの時間でつくられたこの城塞は彼の大望がソロモンの奇跡であることを示す。その年代が表すように、イスカンダルの城壁の体現である。賢者は言った、第二のイスカンダルの城だと。(neshān ze sadd-e sekandar cho dād' tārīkhesh kherad be goft' ḥeṣār-ē sekandar-ē thānī) [8]

ここでは一地方都市の支配者の市門建造をアレクサンドロスの城塞建設になぞらえているのだが、このイスカンダルの城壁とはコーランにもそのエピソードが含まれているゴグとマゴグを閉じ込めたという伝説の壁を指しているのであろう［Cf. Anderson 1932］。アレクサンドロスが実際に都市や記念碑を遠征先に多く建設したことは史実であり、そこからアレクサンドロスの偉大な建設者としての伝説が生まれたわけであるが[9]、18世紀に実際に建てられた市門の由来書きがその伝説を踏まえているというところに、また歴史と伝説の重層性をみることができよう。しかしここでは、先述した「バームクーヘン」構造でいえば大分外側にきており、アレクサンドロスの具体的な模倣というよりも、その名を掲げることが一種の「飾り」のような機能を果たしているのである。

歴史上でアレクサンドロスに憧れ、模倣しようとした支配者は、ナポレオン、カージャール朝イランのファトフ・アリー・シャー、アルバニアの民族的英雄スカンデルベグ等々、他にも挙げ始めたら切りがない。アレクサンドロスの伝説は歴史的コンテクストにおいて常に再生され続け、幾世代もの君主、征服者、権力者たちにインスピレーションを与えてきたのであった。

---

8)《ḥeṣār-ē sekandar-ē thānī》が1196年を示す māddeh tārīkh（年代表示銘）になっている［Kārang 1351: 24］。

9) アレクサンドリア建設にまつわる諸伝説については、拙論［山中 1992］参照。アレクサンドロスによる創建伝説を持つ西アジアの都市は少なくない。

参考文献

Anderson, A. R.

1932 *Alexander's Gate, Gog and Magog and the Inclosed Nations,* Cambridge, Mass.

Bieber, M.

1964 *Alexander the Great in Greek and Roman Art,* Chicago.

Bohm, Claudia

1989 *Imitaio Alexandri im Hellenismus: Untersuchungen zum politischen Nachwirken Alexanders des Grosen in hoch -und späthellenistischen Monarchien,* München.

Cicero

1965-70 *Ad Atticum,* ed. D. R. Shackkton Bailey, Cambridge.

Croisille, Jean-Michel

1990 *Alejandro Magno, modelo de los emperasoros romanos,* (Actes du IVe Colloque international de la Société Internationale d'Études Néroniennes), Bruxelles.

Cunningham, D. R.

1971 *The Influence of the Alexander Legend on some Roman Political Figures,* Diss., Washington University.

García Gómez, Emilio,

1929 *Un texto árabe occidental de la Leyenda de Alejandro, según el manuscrito ár. XXVII de la Biblioteca de la Junta para ampliación de estudios, edición, traducción española y estudio preliminar,* Madrid.

Grignaschi, M.

1965-6 "Les《Rasā'il 'Arisṭāṭālīsa 'ilā-l-Iskandar》de Sālim Abū-l 'Alā' et l'activité culturelle á l'époque omayadde," *Bulletin d'Études Orientales* 19, pp. 7-83.

1967 "Le Roman épistolaire classique conservé dans la version arabe de Sālim Abū-l 'Ala'," *Le Muséon* 80, pp. 211-264.

1975 "La 'Siyāsat'u-l-'āmmiyah' et l'influence irannienne sur la pensée politique islamique," *Acta Iranica* 6 (Monumentaum Nyberg 2:3), pp. 33-287.

1976 "L'origine et les métamorphoses du《Sirr-al-Asrār》," *Archives d'Histoire Doctrinale et Littéraire du Moyen-âge* 43, pp. 7-112.

1982 "Remarques sur la formation et l'interpretation du Sirr al-'asrār," in *Pseudo-Aristotle 'The Secret of Secrets,' Sources and Influences,* ed. W. F. Ryan, C. B. Schmitt, London, pp. 3-33.

1993 "La figure d'Alexandre chez les Arabes et sa genèse," *Arabic Sciences and Philosophy* 3, pp. 205-234.

Ibn al-Nadim

1871-72 *Fihrist,* ed. Flügel & Müller.

Kārang, 'Abd al-'Alī

1351 *Āthār-e bāstāstānī-ye Āzarbāijān,* vol. 1, Tehran.

Kienast, D.

1969 "Augustus und Alexandre," *Gymnasium* 76, pp. 430-456.

Latham, J. D.

1983 "The Beginnings of Arabic Prose Literature: the Epistolary Genre," in Beeston, A. F. L. et. al. (eds), *Arabic Literature to the End of the Umayyad Period,* Cambridge.

Mattingly, E.

1923 *Coins of the Roman Empire in the British Museum,* London.

Michel, D.

1967 *Alexander als Vorbild für Pompeius, Caesar und Marcus Antonius,* Archaologische Untersuchungen, Brüssel.

Nöldeke, Th.
1890 "Beitr ge zur Geschichte des Alexanderromans," *Denkschriften der kaiserlichen Akademie der Wissenschaften,* Philosoph.-hist. Classe 38, Abhandl. 5, Wien.
Plutarch
1972 *Moralia 4,* ed. F. C. Babbitt, London.
Sallust
1891 *Historiarum Reliquae,* ed. B. Maurenbrecher, Leipzig, Fr. 3. 88.
Schweitzer, B
1948 *Die Bildniskunst der romischen Republik,* Leipzig.
Strabo
1930 *Geographia,* ed. H. L. Jones, Cambridge Mass.
蔀　勇造
1989 「アラビアのアレクサンドロス—ズ・ル・カルナイン考序説」『比較文化雑誌』4, 72-98頁。
Tarn
1921 "Alexander's υπομνηματα and the 'World-Kingdom'" *Journal of Hellenic Studies* 16, pp. 1-17.
1939 "Alexander's Plans," *Journal of Hellenic Studies* 59, pp. 124-135.
Weippert, O.
1971 *Alexander-Imitatio und römische Politik in republikanischer Zeit,* Diss. Würzburg.
Wirth, G.
1976 "Alexandre und Rom," in E. Badian (ed), *Alexandre le Grand. Image et Réalité,* 181 ff.
Wlosok, A. ed.
1978 *Römischer Kaiserkult,* Darmstadt.
山中由里子
1971 「都市の誕生と死—アレクサンドロス伝説におけるアレクサンドリアとペルセポリス（上)」『比較文學研究』61, 120-143頁。
1998 「アリストテレスのアレクサンドロスへの手紙—アラブ世界への移入—」『オリエント』41 (2), 229-244頁。

平成15年3月31日　発　行　非売品

JCAS連携研究成果報告5
西アジア社会の重層的構造

編集・発行　国立民族学博物館
地域研究企画交流センター
〒565-8511　吹田市千里万博公園10-1
TEL 06（6878）8343（事務室）

印　　刷　株式会社サンウエスト
〒535-0003　大阪市旭区中宮4-6-11
TEL 06（6953）6800（代表）